日本人のキリスト教受容とその理解

宮崎賢太郎

はじめに

筆者は一九九六年に出版した『カクレキリシタンの信仰世界』のなかで「カクレキリシタン研究において常に問われる問題は、現在のカクレはいまだにキリスト教とよぶことができるのか、あるいはもはや完全に変質し、民俗宗教の一つに変容しているのかということである」[1]と述べたが、このテーゼ自体誤った予断にもとづいていた。なぜならこの問題提起の根底には、すくなくとも布教当初は正しいキリスト教が受容されたという前提に立った議論であるからである。キリスト教の受容と変容の問題を論じるためには、日本にキリスト教がもたらされたとき、日本人はキリスト教をいかなる宗教として理解し、いかなる形でこれを受け止めたのかという問題が検討がなされなければならない。そのうえに立ってはじめて「接触―受容―変容―土着」という文化変容の問題を論じることが可能となる。

しかし、筆者自身「(日本におけるキリスト教布教)初期の民衆がどの程度カトリック教義を理解していたのかを実証的に明らかにするのは、歴史的な資料の不足によってきわめて困難である」[2]と逃げていたし、キリシタン研究の権威高瀬弘一郎氏ですら「いかなる動機で改宗しようと、それは問題ではなく、肝心なのは受洗後真正のキリスト教徒になったかどうか、という点であるが、このことはその問題の性質と史料的制約から、解明はきわめて困難である」[3]と述べているように、このテーマはキリシタン研究上の難問のひとつである。

筆者はザビエル渡来以降約四百五十年を経過した現代のカクレキリシタン信仰の日本における土着の姿については、十年有余の調査研究によってある程度見通しがついたように思う。本稿においては、まずキリシタン時代と呼ばれるキリシタン史初期の約百年のなかで